

JR西労（JR総連）の定期大会が大きく混乱したようだ。JR西労およびJR総連が情報を公表しておらず、現時点、真偽不明の段階ではあるが、JR東海労新幹線関西地方本部が発行している「津崎裁判ニュースNo15 及びNo16」によると、7月7日に開催されたJR西労第36回定期大会において、「スローガン（案）」及び「運動方針（案）」が否決され、継続審議となるとともに、JR採用世代の本部役員の3人が役員を辞任した模様。

同ニュースにおいて、JR東海労新幹線関西地方本部は、「執行部が提出した活動方針そのものが組合員から突き放されたという事実は、現執行部への決定的な『不信任』を意味する。まさに西労の本部組織は機能不全に陥っており、足元からガタガタに崩壊している実態が白日の下にさらされた形だ」とJR西労本部を批判している。

～JR西労(JR総連)における内部分裂か!?!～ 定期大会でスローガン(案)及び 運動方針(案)が否決された模様

予め計画？この否決、混乱は仕組まれたものなのか？

同ニュースによると、定期大会の冒頭のJR西労・前川委員長、JR総連・佐藤委員長、JR貨物労組関西地本・斎藤委員長の3人からの挨拶において、彼らが言うところの「津崎・熊谷裁判」について言及がなかったことに対して、現場（代議員）の怒りを買ひ、スローガン（案）及び運動方針（案）が否決され、JR西労は大混乱している、というストーリーである。しかしながら、これまで発行してきた本紙やJR東海労が発行している機関紙等を元に推察するに、本定期大会での混乱は、予め仕組まれたものではないか、とみている。

本紙No.1037以降で、JR総連とJR東海労との対立の概要やその本質（JR内における革マル派の影響を受けた役員等による内部対立）、JR総連によるJR東海労の「除名」、組合員個人の利益追求よりもそれぞれの組織の温存・建設を優先する姿勢、革マル派と自認する浅野孝氏が結成に関わったJRひがし労の堀口真明氏とJR東海労OBの京力正明氏との内通などを指摘してきた。その後、JR東海労は、JRひがし労との連携を、日を追うごとに強め、「横断的労働組合の組織化」の動きを活性化させている。

JR東海労の機関紙「JR東海労第510号」では、JR東海労が6月14日に開催した第44回定期大会での淵上委員長の挨拶要旨が掲載されており、そこで「JR総連は、2029年JR東海労とJR西労の解散を（中略）決定し、崩壊の道を歩み出しました。今JR西労の中で解散方針に反対する動きが出ています。その動きと連携した取り組みも含めて進めていきます」「今大会で『JR東海労と共に歩む会』の結成を承認して頂き、（中略）更に拡大に向けて奮闘して頂きたいと思います。今大会での結成に向けて、何人かの方に加入を呼びかけています。既に加入を承諾して頂いている方もいらっしゃる」と記載している。JR西労の定期大会よりも前に、淵上委員長がこのような挨拶をしていることから、JR内における革マル派の影響を受けた役員等による何らかの動きが事前にあったとみて良いと思われる。

つまりは、この間の経過を踏まえると、JRひがし労・JR東海労が、JR西労本部に不信感を持つ人物に事前に接触しており、JR西労の定期大会での混乱を企てたとみるのが自然ではないだろうか。加えて、「津崎裁判ニュースNo16」に、「風聞によると」と枕詞はあるものの、「15名の代議員のうち、12名が中央本部の組織運営への不信や不満の発言をする凄惨な状況であった」「辞任した3名の平成採役員を辞任に追い込んだ背景として『本部を上回る組織（＝M組）』の存在があることを明確に指摘された」「『平成採本部役員・中新氏がひがし労の役員と繋がっている』という情報を被告津崎が流布していたことが暴露され、その津崎を擁護する西労本部の姿勢を弾劾する声も浴びせられた」という具体的な内容が記載されていることを踏まえると、JR西労内部にJR東海労へ情報を提供する内通者がいるとみられ、この間も“分派”活動を繰り返してきた革マル派及びその影響を受けた役員における内部対立の一つの現れであろう。

6月1日にJR総連の新執行委員長に就任した佐藤英樹氏及びJR西労本部は、この状況にどう対処するのだろうか。はたまた、“沈黙”を貫くのであろうか。引き続き注視していく。